アダム・ミュラー

赤羽豊治郎

I

フィヒテは「封鎖商業国家論」において，その理想国家には，「人各各に初めて彼のものを与え，始めて彼に財産を得しめ，しかる後に彼にこの状態の保護をなす」義務があり，そのため経済領域に対する各種の積極的干渉を行うべきである，と論じ，厳格なる職業配分・計画生産・配給制度ならびに公定価格制度をあげている。しかも，この国家はすべて市民の対外活動を禁じ，いわゆる封鎖体系（クローズト・システム）を維持し，世界貨幣（金銀）の国内流通を認めない。[1]

アダム・ミュラーの処女論文はフィヒテのこの書の批判であつた。[2] 当時，かれは熱心なるスミス学徒として自由主義の影響の下にあり，かれのフィヒテ評論もその線に立ち，「理性国家は理性によつて建設され，保障された社会状態である。したがつて，その存在は個個人がその行為において不断に理性に服従することを前提とする。そして強要をなす外的権力はこの国では全然問題にならないはずである。」[3]といい，国家権力の圧力を斥ける。

さらに，フィヒテの経済理論についても，とくに「商業国家」に資本概念の叙述なきを指摘し，或は貿易の重要さを説き，また複雑せる現実の経験はかれの世界貨幣と国内貨幣に幸いしない。けだし，貿易は多く貨幣表章（ゲルト・シファイヘン）・為替をもつて決済されるのであつて，フィヒテはこの事実を看過している。封鎖国家はかくの如きものであり，それはかれの「哲学実験室のレトルト」[4]のなかで成立する，というのである。

ミュラーのこの態度は他面スミス学説への傾倒となつて現われ，分業や交換の理論を重視することになるが，文中すでに後の普遍主義的思想[5]の萌芽というべきものがみいだされていることは，注目されねばならぬ。

ところが，僅か数年後（1808—9年），かれがドレスデンでワイマールのベルンハルト侯になした進講録たる，「国家学綱要」では，スミス非難に転じているのである。[6]

かれはいう。総じてスミス学説は一面的であり，「かれ（スミス）の説は常に英国的であつて，国富に対してもこの見地から出発し，英国産業のアクセントたる資本の支配を暗暗のうちに前提している。従つて，われわれがかかる英国学をそのまま輸入せんとする場合は，スミスの国富観はわれわれが住み大陸と名づけるこの大平原には，まつたく不一致の観を呈する都市的特徴を具えている」のであつて，かかる理論はいまなお農業国たる独逸に全面的に適用し得ない。さらにスミスは「土地の本来固有の性質を看過している。かれはその書をあげて，資本は如何に分業によつて生産され，分業と共に実現し経営せられているか，ということのみ観察するのである。」[7]

かく，ミュラーの総括的スミス批判は一応独逸的地盤において，当時の経済的現実を直視しての論議に出発し[8]，後年の歴史学派の先縦者としての貫録を示している。

(1) 拙稿「フィヒテの封鎖商業国家論」信州大学文理学部紀要第八号（昭和33年）
(2) アダム・ハインリッヒ・ミュラーは1779年6月30日伯林に生れ，法律学と国家学をゲッチンゲン大学で修め，伯林でフリードリッヒ・ゲンツ，シュレーゲル，ヴェルナー等の人人と交友し，1805年ローマ旧教に改宗した。1811年以来，墺太利の宰相メッテルニヒの知遇を受けた。かれの著書は哲学・美学・社会学等頗る広範に亘り，経済学に関しては「国家学綱要」（1809年）「貨幣新論」（1816年）及び「全国家学の神学的基礎の必然性に就て」（1819年）をあげ得るだろう。ここでは前の二著述について考察する。
(3) Adam Müller, Vermischte Schriften. Bd. I. 1839. S. 152. 引用は榊原氏による。榊原厳氏「社会科学としてのドイツ経済学研究」（昭和33年）37頁。
(4) Jakob Baxa, Einführung in die romantische Staatswissenschaft. Jena. 1931. S. 175.
(5) 「社会のうちにあつてのみ，人は初めて人となる。自分と並列の人間を通じてのみ，人は世界と自分とのちがいを意識する。社会のうちにあつてのみ，人間の言語（シェプラッヘ・オルガン）はつくられる[9]。」
(6) ミュラーのこの転身事情に，いくつかの憶測がある。なかでも，「当時の独逸インテリゲンチァが文筆をもつて身を立つることの困難の故にその自由浮動的立場をすてた」とみるマンハイムの解釈に注意したい。また「ミュラーが当時かかる物質的動機に進み得たか否かは大して重要でない。」というマイネッケをあげておこう[10]。
(7) Adam H. Müller, Die Elemente der Staatskunst. 1809. Neue Ausgabe. Jena. 1922. Bd. II. S. 20.
(8) Hans Freyer, Die Bewertung der Wirtschaft im philosophischen Denken im 19. Jahrhunderts. 立野保男氏訳ハンス・フライヤー「資本制経済思想の発展」（昭和18年）71—72頁。
榊原氏，前掲書，41頁。
(9) Baxa, Ebenda. S. 175. Fussnote. 訳文は榊原氏。
(10) 森博氏訳 マンハイム「保守主義」（昭和33年）89頁。
矢田俊隆氏訳 フリードリッヒ・マイネッケ「独逸国民主義国家発生の研究」（昭和18年）174頁。

II

ミュラーの国家論は独逸浪漫派国家論の絶頂に立つといわれ，シェリングの有機体的国家論と伝統の国家生活に及ぼす影響を重視したエドモンド・バークに着想を受けた，とみられている。

シェリングはその1802年のイエナ講義「大学における学術研究方法について」において，別書「自然哲学」で示した有機体思考を国家に適用し，国家の有機体組織なることを明かにしている。かれはまず，「狭義の歴史の成果をわれわれは自由の客観的有機体，すなわち国家の形成とした。自然学の存在が必然であると同じく，国家の学も存在する。この学問においては，経験はむしろそれ自身理念に従つて始めて生ずるのであるし，国家は芸術作品として見らるべきなのであるから，国家の理念はいよいよ経験から得られぬのである。」進んで，全体と個との関連を通じて国家の有機的構造を明かにしている。「国家においては，個は全体に対して差別の関係にあるが，その個が全体のうちに生き

ているだけで，全体が個のうちにも生きることはないからである。国家の実在的現象においては，統一は多のうちに存在したから，従つて統一はまつたく多と一つであつた。」[1]（傍点は筆者）

ミュラーはシェリングのこの論旨を継承し，その国家理論を形成したとみられる。[2] また，かれがバークに得た思想は保守主義の精神たる世襲の観念（アイデア・オブ・インヘリッタンス）であつた。これはマンハイムによつて，歴史の連続性の原理と解釈せられてい，[3] ミュラー国家論の背柱をなすものである。バークはその「フランス革命についての諸考察」において，「われわれがこれまでやつてきた，すべての改革は，昔への尊敬の原理にもとづいて行われた。これからなされるかもしれぬすべてのことが，類似の先例・典拠・実例にもとづいて，注意ぶかく行われることを，わたくしは希望し，いな信ずるものである。」さらに，「世襲という思想が改良の原理をまつたく除外することなしに，保守の確実な原理と伝達の確実な原理を提供することを，イギリスの人民はよく知つている。」と説いた。[4]（傍点は筆者）

この世襲という観念は，ミュラーによつて，「先行せる諸時代と次に来る諸時代の連合」[5]という形式に継承されているのである。すなわち，国家は「同時代者のみならず，同空間者（ラウム・ゲノッセン）との連合である。この第二の連合はその持続性をわれわれの敵女，現世（ヱルデ）の他の威大なる特徴に対恃する。この連合はわれわれを万代に生き残らしめ，それ故に一時代から離れ他の時代へ移行するとき，われわれにとつて常に有利である。国家は多数の現存せる家族の結合のみでなく，多数の後続する家族の結合でもある。この結合は空間的に無限大にして親密なるのみならず時代的に不死である。[6]」ここに同空間者とは過去の世代と次の世代とをふくむ。[7]

かように，国家を過去・現在・未来にわたる精神的形成物であるとみるは，バークのものであり，この連続の原理はまたかれの理念的思考に通ずる。ミュラーは始め，その「対立論」（1804年）において，社会生活の基本法則を主体と客体・積極と消極の如き両極性に求め，後の弁証法を予感せしめたが，[8] この理念（イデー）の思考に至つて，かかる対立を遙かに越えた流動の過程を要請することとなつた。

国家を理念によつて把握する着想はすでに述べたシェリングに出ずるものであるが，これを概念（ベグリッフ）との対比において説いたことは，当時すでに彼がゲンツの承認と敬意を得たところであつた。[9]

ミュラーによると，これまで国家を概念的に定義する傾向があり，一たび新事態の発生あれば，これを説明し得ないこととなる。「国家ならびに一切の偉大なる人間的事件には，その本質と言葉や定義のなかにひきくるめ，或は詰め込み得ないところのものがある。新時代，新しき威大な人物は国家に，旧き説明では適合し得ない，他の形式を与える。普通の科学が国家・生活や人間に関しこれを引きづりまわし，売物にする，固苦しい，一度たび書きあげたら永久に役立つ形式を，われわれは概念と呼ぶのである。しかし，国家に関してはいかなる概念も存在しない。われわれの祖先は国家に関して，国家は強制的制度であるとの概念をもつていた。それにも係らず，他の時代が来ると，この最もよき重要なものでも無理にあてはめ得ない。そこで他の概念をつくることにな

る。それすら固守できまい。 けだし概念は何らの運動をもたないからである。」ところが，「われわれがこの高貴の対象について捉えた思考を拡大してみるとき，もし対象が運動し成長するに対応し，思考が働き成長すれば，われわれはその思考を事物に関しての概念でなく，事物の国家の生活の理念(イデー)と名づける。」[10]

われわれは，ここにかれの，国家を常に運動の過程においてあるがままに捉えんとする動態的思考をみいだす。「国家は単なる製造工場・農場・保険局あるいは重商主義者の組合(ゾチエテート)でない。国家とは国民の身体的・精神的欲求の全部，物質的・精神的欲求の全部，物質的・精神的富の全部，内的外的生活の全部を緊密に結合して，無限に運動する巨大な生ける全体」[11]として理解される。それは人間事件の包括的全体であり，一つの生ける全体への結合である。もちろん，ひとは人間制度の重要ならざる部分を，この関連から切り離すことができるが，それではもはや生活現象として，また理念としての国家を感得することはできない。国家は人事のすべて不可分な有機体組織であるというのである。

次にかれの国家の有機体的構造をみるに，「各有機体は無限に多数の有機的体系をふくみ，国家もまた無限に多数のそれに類似の肢体(グリーダー)から形成される。」[12]元来，有機体は「全体は個を，個は全体を保証する」[13]という理論に支えられてい，とくに個が全体に対しては「人格の共同体的事物への献身と犠性」[14]をもつて結びつく。 従つて，国家の本質は「生と死に結ばれた全体」[15]であるという。しかし，個は全体に直接結びつくのでない。個人と国家との間には，身分(シュテンデ)・諸自治団体(コルポラチオーネン)・市町村(コンムーネン)・家族・都市，短言すれば，全体と一つの結合に入るためには，個人の属すべき多くの種類を異にした小生活圏がある。これが国家の機関として生ける肢体(グリーダー)となる。」[16] このうち，家族は基本的なる国家機関とみられ，国家を多数の生起する家族の結合であり，「国家を拡大された家族」[17]とさえ極言するのである。

家族は人類の維持・存続のための最初の結合であり，その本質は老年と青年，男女の基本的対立のうちに潜み，この対立が社会生活を発生せしめる。このことは国家においても同様である。国家の建設は恰も青年時に行われ，間断なく進歩と変化を重ねて，その有益なる制動機(ヘンムシュー)として老年の慎重さを要望する。[18] また男女の相互関係を貴族と市民階級の間にみいだす。前者は国家に伝統と慣習等，不可視のものの代弁者として国家の女性的側面を，後者は可視的なる動産・貨幣の所有者として自由の代弁者として，専ら国家の男性的側面を代表する，[19]それらは互に無限の相互作用を通じて国民的繁栄に到達する，[20]というのである。

(1) F. W. J. Schelling, Werke. Bd. II. Leipzig. 1907. SS 642—44. 勝田守一氏訳「学問論」（昭和23年）139—141頁。

(2) 当時，ミュラーの有機的国家論はシェリングの影響に非ず，とみるはクルックホーンである。[21]

(3) マンハイム，前掲訳書，112頁。 なお，この連続の原理はつとにシュレーゲルの注意せるところでもあつた，とするがヤコブ・バクサである。[22]

(4) Edmund Burke, Reflections on the French Revolution. Everyman's Library, ed. p. 31. 水田洋氏訳「フランス革命についての諸考察」（世界大思想全集版）34—36頁。

(5) Müller, Ebenda, Bd Ⅰ. S. 59ff.
(6) Müller, Ebenda, S, 60.
(7) Müller, Ebenda, Bd. S. 322. Baxa, Anm. 59.
(8) マンハイム，前掲訳書，149頁，155頁。註（140）
(9) Baxa, Ebenda. S. 165. Anm. 1.
(10) Müller, Ebenda. Bd. Ⅰ. S. 20.
(11) Müller, Ebenda. S. 37.
(12) Baxa, Adam Müller Ausgewählte Abhandlungen. Jena. 1921. S 24.
(13) Müller, Ebenda. S. 74.
(14) Müller, Ebenda. S. 279.
(15) Müllen, Ebenda. S. 84.
(16) Müller, Das Répräsentativsystem. Deutsche Staatsanzeigen. Ⅱ 1817. S. 18f. zitiert bei Kluckhohn.
ミュラーのこの立言と比較さるべきはフリードリッヒ・リストの初期の国家論の一節である。「国家は多数の州の結合であり，州は多数の県の結合であり，県は多数の町村自治体の結合であり，それらの自治体は個人を全体的目的の到達に導く結合である。」F. List, Kleinere Schriften. Erster Teil. Herdflamme. Jena. 1926. S. 133.
(17) Müller, Ebenda. S. 89.
(18) Müller, Ebenda S. 90. S. 101.
(19) Müller, Ebenda. S. 109. S. 303.
(20) Paul Kluckhohn, Persönlichkeit und Gemeinschaft. Halle/Saale. 1925. S. 73.
(21) Kluckhohn. Ebenda. S. 65.
(22) Baxa, Ebenda. S. 32.

Ⅲ

かような有機体的国家論に立つ限り，国民経済は国家の営む「人間事件の全体」の経済的側面と解釈されることになる。国家の一分節として，他の諸生活と補足調和の関連を営み，国家目的の実現に努める。

国民経済は「まず人間と財との関係，第二に人間と財とが国家に対する関係」であるが，[1] 個人経済は国家組織の一分肢（細胞）としてまた国家は個人の経済的生存の保障に当るものと規定される。個人が国民経済への参加はかれが属する各身分（シュテンデ）（等族）の交互作用を通じて行われる。「完全なる経済生活は四つの，僧侶・貴族・働く市民と純粋にしてなお出現をみないが商人，いい換れば教（レール）・武（ウエール）・養（ネエール）および商（フエルケール）のそれぞれ固有の発達と相互作用から成立する。[2]」この身分尊重の思想はかれの中世主義の現われとみられる。もつとも最後の商（フエルケール）の身分のみ現行のそれであつて，中世と将来を媒介する地位にある。

かく，ミュラーの国民経済は国家あつて始めて成立する。「国家は常にあらゆるものの中心にあり，一切の富，一切の生産，一切の消費も等しくわれわれが国家と呼ぶところのこの永遠のものに対する反作用の光の下に観察されねばならなかつた。[3]」しかもそのすべてを「飛躍の生の，運動のなか」で取扱うことであつた。

まず，これを富に就て，或は生産力の理論に就て明かにしよう。かれは富を論ずるにあたつて，「富は概念でない，単なるもの（財）に存するにあらず，ひとがものを確保

し増加する間にも，それは確定されない。その使用のうちに，所有のうちにみいだされる。富は何んであろうと，それは法とまつたく同じく静止において，或は貯蔵された財産からは，恰も法が貯蔵された法学研究所からは同様に，認識されない。[4]」従つて，この立場では富そのものの存在よりも，生産過程が重要となる。何よりも生産論が意味をもつに至るのであつて，通説が二つの生産要素として土地・労働および資本をあぐる代りに，自然・人間および過去をもつてする。自然は土地，人間は労働を意味するは論なきところであるが，[5]労働に就ては筋肉労働のみならず精神的諸力の重要性を説いた。スミスが非生産的とみなした俳優・音楽家・僕婢・政治家・僧侶・学者のそれをあげている。なるほど，かれらは「市民的交換において譲渡し，かつ商業の通則に従う有形的商品を生産しない[6]」が，生産に協力する。精神的諸力，とくに政治家の思想は生産に不可缺条件である。これあるが故に，国家は自らを生産し，国民経済の基礎を確保し得るのであり。[7]この種の生産こそ理想的生産物として国民的富に数えらるべきである，というのである。

資本は過去の時代の現代への貢物（トリブート）であつて，二面性をもつ。一は精神的資本，他は物質的資本であつて，言語は前者を，貨幣は後者を代表する。[8]精神的資本は一国民の経験や発明等生産に新鮮さを加うるすべてを指す。かれのこの資本や生産力に関する意見はフリードリッヒ・リストに通ずるものであるが，それらはスミス学派に対する独逸経済学の貴重な思想財の一つといえる。かく土地・資本と労働とは富そのものの源泉でない，その要素たるにすぎぬ。「それらの活潑なる交互作用こそ富の唯一の源泉である。[9]」

富はかかる諸要素の交互作用の産物である。ところで，かれは以上の精神財が物質的生産の根拠となるを明かにし，生産力を附与する政治家その他の活動のもつ生産培養的貢献の大なる意味を認めている。かれらの実践的効果は国家を通じて個人の生産力を刺激するであろうし，また制約もしよう。精神諸財は国富の一部となり，生産の前提条件となる。かかる前提の下において，「各個人の生産力はそれ自らがより高き生産力，市民的社会あるいは国力から，生産され調節せられる限り，発生し媒介せられる。[10]」

進んで，かれの貨幣理論をみよう。ここでも，かれの「人格的・有機的特徴[11]」が前面に出ずる。財が価値を有するは所有者自身のためのみでなく，あらゆる個人・あらゆる市民に有用なるが故である。前者はスミスの使用価値ともいうべき個人的価値，後者は交換価値ともみるべき社会的価値として一般に認められている。財は私用に供せられると同時に，ある程度社会の利用に供せられる。そのために，財は人と人とを媒介せしめる。人を人に結合せしめ，人と財とを結合せしめるものが貨幣である。「国家におけるすべての個体は人も財も二重の性格をもつ。第一にそれ自身に対し，或はそれ自身として何ものかであり，他は貨幣としてそれはまたなお何物かである。貨幣は一つの理念である。貨幣は市民社会にあるすべての個体に内在する性質であつて，それによつてかれらは多かれ少かれ他の個体と結ばれ，または結ばれた個体が互に離れたりするのである。[12]」

かく，かれの貨幣本質論は専ら人格的側面から考察され，人間結合の契機たる機能を果すものと規定されている。恐らく，貨幣の通念である財の一般的交換手段たる経済的

機能を，社会学的に改鋳した解釈ともみられる。のちに再考しよう。ところが，かれのこの所説はさらに飛躍し，国家における市民自身も，多数人を必要とするときは，その程度において真の貨幣となる。これに続いて，「経済諸関係の結合の技術を正しく理解する」[13] 政治家もまた生ける貨幣である，との有名なる主張が述べられることになるのである。[13]

貨幣は社交的事物（ゲゼリゲ・サッヘ）である。「貨幣は多かれ少かれ一切の事物（もの）に内存する社交性の特質に外ならない」[14] から，その素材の金属の如何に拘泥せず，反つて紙幣をもつて理想的なる通貨とみるに至る。ミュラーは紙幣を人間結合の表現手段たる言語に擬らえ，言語貨幣（ウオルト・ゲルト）の表現を与えている。しかも，これは貨幣の発達過程に照しても不条理でない。「金属は刻印によつて，信用の一方式によつて，始めて貨幣に高められる。また市民生活の発展においては，けつきよく国家紙幣によつて表現される。——これが原則である。」[15] 紙幣が貨幣の理念を具象化して国家の有機的結合を表章するとみるのであるが，その真実なる基礎は単なる言語でない。言語は一般に説者の意思表示の手段にすぎぬ。反つて，それは言語をもつて表現される一国の経済的国力であるといわねばならず，従つてメタリストの主張する金属に限らない。「信用の理論のなかに…高度の，唯一の真の貨幣が，その点では金属貨幣は不完全な代表者でしかないが，すなわち国語（ナチオナール・ゲオルト）ないし国力（ナチオナール・クラフト）が明かとなる。これは金属貨幣から嘲笑されているが。」[16]

ひとはこの叙述をもつて，ミュラーを唯名説の先駆者の一人とみなすのであるが，[7] かれになお金属貨幣も紙幣も同一貨幣事象の盾の半面をそれぞれ代表する，との注目すべき発言がある。「財貨としては貴金属，人格的諸力としては言語をあげることができる。それらの各各は人間が絶えずすべての人格的問題と物質的問題とを結合せんと努むる融合を，その領域において完成せんとするのである。貴金属は財貨による自然的紐帯であり，言語はあらゆる人格的諸力による自然的紐帯である。それ故に，言語と貴金属とは貨幣として表現する二つの形態であり，経済的国家の二つの偉大なる意体である。」[18] そのために両者のいかなるものも，それ自身で貨幣の本質を十分に表現しない。貨幣の金属性に執着する者も，その理想的見解に近づく者も共に貨幣事象につき誤謬かつ死せる表章をもつに至ろうというのである。

この発言はナポレオン戦争当時の英吉利および墺太利におけるインフレーションの歴史的事情に基くものの如く，かれ自身は最良の貨幣制度の理論的根拠をかかる見解に求めたのであつた。曰く，「一国の国内的福祉のすべては人格性と事物性との均衡に還元される。すなわち，あらゆる人格性における固有の人格的なるものは経済的には信用を現わし，あらゆる事物性における固有の実在的なるものは貴金属である。イングランド銀行は事物的財産の実現と流通をまつたく考慮することなく，一切の個人信用を人格化することに従事した。そして全国民・国王および議会は銀行券を雲隠れした金の仮の代表物と名づけた。」[19] われわれはミュラーのこの記述によつて当時のイングランド銀行券の膨張過程の一端を窺うことができる。また1818年の墺太利の国家破産による混乱の収拾策として，ミュラーの示したものは，ワリス伯の主張とする通貨収縮の一策をもつて達し得るのでなく，金属貨幣と紙幣との正しき均衡を目指す貨幣制度の樹立で

あつた。[20] これはたんに本位制度の時論的要求に答えるだけでない。問題は深く貨幣の本質に根ざす，とみるのである。

さらに，かれは世界貨幣（金銀）と国民貨幣（紙幣）に触れる。この区別はすでにフィヒテの世界貨幣と国内貨幣にある。それはフィヒテの「理想国たる商業国家」の経済施策が外部から攪乱されるを遮断するための理論的用具であつた。[21] ミュラーも世界貨幣は所有者に一切の富の直接の源泉を確保せしめ，個人的利益は世界貿易にのみ依存するとの錯覚を与えるとなし，[22] 警戒の念を緩めない。金属貨幣の本質は世界経済的であつて，国民経済的でない。[23] 従つて国家の有機的経済生活を欠く。ところが，国民貨幣は全国民の心のなかに生き全国民的価値の中心にあり，すぐれて国家的・愛国的の性格をもつ。「貴金属は一般に国民体によるに非ずんば何物にも代え得られない。この，或は政治的独立のみ，かれらを国境内に退避せしめる。国民体の紐帯が緩るみ，政治的従属が可能になれば……金属貨幣への需要が高まることになる。」[24] この敍説は必ずしも，フィヒテの如く，世界貨幣を敵視するのではない。何故ならば，かれが一国の貨幣政策の基調を両貨幣の均衡に求めんと主張するからである。だから，「対外的ならびに国内的経済のこの相互交渉を育てあげる政治家は絶えず，国民貨幣と金属或は普遍貨幣とを仲介しなければならぬ。かれはこの二つの貨幣種類を越えた高度の，生ける貨幣でなければならぬ。」[25]（傍点は前出）

(1) Müller, Versuche einer neuen Theorie des Geldes. 1816. Neue Ausgabe. Jena. 1922, S. 15.
(2) Müller, Elemente. Bd. II. S. 41.
(3) A. Gray, The Development of Economic Doctrine. London. 1951. p. 221. 訳文は榊原氏。前掲書，45頁。
(4) Müller, Ebenda, Bd. I. S. 348.
(5) H. Kretschmar, Die Einheit der Volkswirtschaft in den älteren deutschen Wirtschaftslehren. Jena. 1930. S. 212.
(6) Müller, Ebenda. S. 375.
(7) Müller, Ebenda. S. 395.
(8) Müller, Ebenda. Bd II. S. 29.
(9) Müllen, Ebenda, S. 8.
(10) Müller, Ebenda. Bd, I. S. 395.
(11) Baxa, Ebenda, S. 179.
(12) Müller, Ebenda. S. 351.
(13) Müller, Ebenda. Bd. II. S. 385. Baxa, Anm.
(14) Müller, Versuche. S. 139.
(15) Müller, Ebenda. S. 140.
(16) Müller, Elemente, Bd. I. S. 359.
(17) Baxa. Die Wirtschaftslehre Adam Müllers. Nationalwirtschaft. 2/2. 1928. S. 132.
(18) Müller, Versuche. S. 141.
(19) Müller, Ebenda. S. 246.
(20) Baxa, Ebenda. S. 133. und,, Die Nationalökonomie und der Idealismus." Nationalwirtschaft. 1/3 1928. S. 332.
(21) 拙稿，前掲論文。
(22) Müller, Elemente. Bd. I. S. 453.

(23) Müller, Ebenda. Bd II. S. 133.
(24) Müller, Ebenda. S. 141ff.
(25) Müller, Ebenda. S. 146.

IV

敍上においてミュラーの浪漫主義・有機体的国家理論や経済論を窺知したわけであるが，ここではかれの独逸歴史派経済学との関連について二・三の註釈を施してみよう。

まず，さきにふれた如く，かれは歴史的方法の覚知者の一人であつた。これはスミス理論がすぐれて，イギリス産業および貨幣経済の一面的科学であり，いまなお農業国たる大陸にスミス理論やイギリスの現状を，そのままモデルとするを得ない，とせる点である。[1] このことはただかれ独自の発言でなく，すでにゾーデンやリストにも共通するところといつてよい。かれの主張が歴史派的として注目さるべきは，さきにふれた理念的思考に支えられていることであつて，事物を過去・現在・未来を通じて流動の姿において把えんとする動態的要求が前面に現われてくる。この間に，「進歩主義者は現在を未来の発端として，保守主義者は現在を過去の終局段階として，体験する」[2]ということになる。保守主義的主張たるかれの中世主義はかかる流転相反のなかに拠点を求めている。もしかかる原理を欠けば，それはたんに浪漫的憧憬として取扱われるにすぎず，百年前すでにマックス・ヴィルトが評した如く，「かれの中世主義はかれの思想発展において毫も考慮する必要がない」[3]ことになりかねない。

ところで，中世主義はミュラーの国家論や経済論のモデルであり，素材でもあつた。かれが高く評価した封建主義の根本思想は「人と事物との崇高なる融合」[4]であつた。家産は数世紀にわたり人格的性格を保つていたし，これは商業の経営資本に就ても同様であつた。従つて，土地とその収益，資本と利子を所有者が肆意的に処分するは非難の的となつたわけであり，財産はすべて「不死の家族」と考えられた。財産と所有者との間には一種の夫婦関係ともいうべきものが成立し，すべての財産がこれを目指してい，ローマ法的概念では律し得られない。財産は物として家族やその属する共同体（コルポラチオン）に役立つが，また人格としてそれ自身の空間をもつ，とみられた。[5]

さらに，これらの協同体は一定の人格的紐帯（協同体精神）によつて結ばれていた。ギルドの組合員は親方であり，職人・徒弟と共に一種の道義的人格を形成し，ギルド財産は組合員の道義的・法的諸関係の核心をなし，それは組合員の生計・栄誉と各種の権利の保全に供せられた。組合員の仕事は全体の一職務と考えられ，それはまたギルドの細胞（グリード）としてギルドそのものの充実と発展に献身することとなり，各ギリドは互に補足の感情をもつて，より高度の全体に統合された。

かような中世的特徴が次第に色あせ，コオポラチオンへの嫌悪が目立ち，中世の表章ともいうべき身分協同体の崩壊となつた。この傾向はローマ法の継受以来，人格と事物の鋭き分離が行われ，経済生活の近世的発展がこれに随伴したためであつた。ミュラーにとつて，かかる事態の出現はウンデイングと思われ，中世経済再現の要望となつ

た，と解される。

そこで，貨幣であるが，これはローマ法的精神の化身とみられ，かれの期待する経済関係では廃棄さるべき運命にあつた。ところが，それはじじつ不可能であるから，これが改釈の必要を生じ，「アナロギイの魔法の杖を振り，論理を歴史のなかに投影することとなる。[6]」かれは貨幣の社交性たる機能に着目し，それを人と人とを結合する手段とみるのである。これこそ，かの協同体精神の結晶（信用）に比せられるべく，そのため，「貨幣はつねに市民社会のすべての個体たる事物に内在する性質」（前出）として把えられた。事物許りでない。広く人間自らを貨幣化するに至つた。アレキサンダー・グレイが，ミュラーの貨幣をもつて，市場の日常概念に遠ざかつた事物とみたのは，恐らく次元の相違を指摘したに止まるまいと考える。[7]

次に，かれが国家を身分国家と規定するに至つたは，明かにその中世主義の現われである。「国家の性質をより明かにかつ確定的に，僧侶・商人及び市民の四つの永遠の身分の相互生活と敍述する[8]」といい，一切の国法の足場を身分関係に求め，当時のフランスの代表制度を評して，「今日の立憲政体という小細工は，中世の身分関係の代替物をみいだそうとする永久に不幸な試み以外なにものでない[9]」というが如きはその証左であろう。

ミュラーと歴史派との関連の第二は有機体的国家論である。国家有機体はかれによつて，或は人間に，家族に或は宇宙に比せられているが，[10] これはロッシャーに継承された。ロッシャーは国民経済を国民生活を構成する一分肢と目し，その成長は国民と共に開花しかつ凋落するとみるのであり，[11] 経済の発展法則を有機体発展法則として把えている。かように有機体の概念と発展の概念とには密接なる論理的関係にある。[12] これはミュラーにも認められる。われわれは前にかれの歴史観察を理念の動態観察に求めた。このことは経済現象の歴史的把握を，「有機体的社会考察[13]」によつて確証することとなる。かような手法はロッシャーの歴史的方法の要約の第二第三の方法にあたり，経済現象を現在と過去との有機的結合において正しく観察し評価することであつた。[14]

第三は国民及び国民体（ナチオナリテート）に関するかれの理解である。独逸経済学はリストの国民体の理論によつて国民主義的性格が与えられたが，その素地はすでにミュラーによつて培われていた。かれは，個人と人類とを結ぶ媒介者として，とくに国家ないし国民体の理念あることを明かにして，曰く。「個個の……市民と永遠の人類……との間に媒介者がある。かれは有限の人間と無限の人類とを融合・和解せしめ，かつ両者は互に理解し合う形象（ビルト）であつて，これは特殊の国家の理念あるいは国民体である。この理念は近年生じたもので，以前にはなかつた。[15]」それは「あらゆる他の理念の母であり，一国民の国民精神の地位にある。[16]」この理念のゆえに，国家は本来の生活原理をもつこととなる。かれは国民体を「個人的利害と公共的利害の間の神聖な調和，相関及び相互作用[17]」であるといい，同一の天地・同一の言語・同一の習慣によつて色どられ，互に滲透するとき発生するのである。その自覚は歴史的・政治的な状況において顕著となる。プロシャの国民体はただ七年間の奮斗の成果であつたとみ，[18] それに干連して独逸の政治的統一に触れてもいる。[19]

かような国民体の理念が確定し，それが最高のものと考えらるときは，一切の他の経済的努力は人間的意味をもち，生産・需要および販売(ヴェルトリーブ)の一般的法則を特殊の研究に投ずる労苦は償われることとなる。[20] スミス学派の諸概念はこの種の理念に気づかず，遂ひに国民的富の本質さえ認識し得なかつた，というにある。けだし，「スミスはかれを取巻き，かれに浸込みその魂ともなつたところの，国民体を考察し意識しようとはしなかつたからである。[21]」ここに至つてもはや，国民体に就て，ミュラーとリストとの距離は数歩の差とみられる。この相似は解放戦争前后の，それに引続きこの国に澎湃として興つた国民感情の端的な現われであらうか。

以上，われわれはミュラーを独逸歴史派経済学の先駆者として取扱い，かれの国家・経済学説の大要を摘記した。その理論の脊柱をなすは狂信に近い保守主義の主張であつた。かれはいまフライヤーによりドイツ・レストラチオン期の「文筆戦線における浪漫派の主要代弁者[22]」とみなされ，古くはカール・クニースによつて，「アダム・ミュラーの国民経済学的著作はこの王政復古の正統性と必要性を経済的事物の領域で証明すべく努力したし，それ故にすでに経済理論の歴史に，一の重要なかつ教義豊かなドクメントとなつた。ミュラーはスミス理論によつて代弁され，革命的行動力によつて事実上引き入られた財貨生活を再び排除して，中世経済の規範を導入しようと考えている。[23]」と評価されているのである。　　(1954. 11. 11)

(1) Müller, Ebenda. Bd II. S. 18.
(2) マンハイム，前掲訳書，58頁。
(3) Max Wirth, Grundzüge der National-Oekonomie. Erster Band. Köln. 1861. S. 149.
(4) W. Roscher, Geschichte der National-Oekonomik in Deutschland. München. 1874. Neudruck. S. 773.
(5) フライヤー，前掲訳書，83頁。
(6) フライヤー，前掲訳書，83—4頁。
(7) Gray, Ibid. P. 226.
(8) Müller, Ebenda. S. 7.
(9) Müller, Ebenda. S. 72.
(10) G. v. Busse, Die Lehre vom Staat als Organismus. Berln. 1928. S. 40.
(11) 拙稿，「ウイルヘム・ロッシャー」松商論叢第六号。(昭和34年)。
(12) フライヤー，前掲訳書，158頁。
(13) T. Surany-Unger, Philosophie in der Volkswirtschaftslehre. Bd. II. Jena. 1926. S. 144.
(14) 拙稿，前掲論文，185頁。
(15) Müller, Ebenda. SS. 161—2.
(16) Kluckhohn, Ebenda. S. 77.
(17) マイネッケ，前掲訳書，199頁。
(18) Müller, Ebenda. S. 139.
(19) Müller, Ebenda. S. 92.
(20) Müller, Ebenda. S. 17.
(21) Müller, Ebenda. S. 56.
(22) フライヤー，前掲訳書，87頁。
(23) Karl Knies, Die politische Oekonomie vom Geschichtlichen Standpunkte. Neudruck. Leipzig. 1930. S. 280.